

三栄本秀は鈴木正三の愛弟子

鈴木正三 (天正7年1579 ~ 明暦元年1655 示寂77歳)

三栄本秀 (天正10年1582 ~ 万治2年1659 5月17日 示寂78歳)

元和6年(1620) 鈴木正三 42歳で出家。

則定の鈴木家は重成が継いだ。正三は高橋七十騎(高橋衆)の中の鈴木九大夫重次の家を12歳の時、継いでいた。その家は三宅某の四男が養子として跡目を継いだ。

元和8年(1622) 香積寺10世として台巖榮天が住職する。三栄本秀41歳。

元和9年(1623) 鈴木正三 45歳 千鳥寺で修行中。 三栄本秀42歳。

『石平道人行業記辨疑』

台巖、本秀二大老、帰師之道、晨夕参承。

『驢鞍橋 下 百四十八』

本秀和尚ノ云、師ハ近代ノ佛法ノ中興也、其先、終ニ誰デモ修行ト云沙汰シタル人無

『驢鞍橋 上 三十一』

一日江州衆來リ、國本ニテハ、何レモ本秀和尚ノ教エヲ承ルト云、師聞テ曰、一段ノ事也、此和尚ハ、人ヲ損フ事有ベカラズ、今時道者ト云人、先我能者ニ成テ打上リ、人ヲ印可シテ、其儘人ヲ悪クスル也、然ルニ此和尚ハ、先我足ズニ居ラル、間、何トシテ人ヲ許サレンヤ、師亦曰、其辺ニテハ、若キ衆法ヲ聞、伎

量過ルト云沙汰ナシヤ、我少シアブナク思フ也、彼人沙汰無ト云、師亦曰、其地ノ何某ハ、此前死苦ニ責ラレケル間、今ニ頼敷思フガ、弥修行募リテ見ユルヤ、彼人今程沙汰モナシト云、師曰、一旦死ノ來ル事有トモ、油断シ娑婆ズキニ成タラバ、跡モ無クナルベシ、少少死ノ來ル様也共、ヒシト死機ニ成事ハ、功ヲ積ズンバ有ベカラズ、我モ六十余リニシテ、慥ニ是ヲ知ルト也、

『驢鞍橋 下 十三』

三州千鳥山ニ在テ、律ヲ行ヒタル時分ハ、麦粥麦飯ニテ送リケル、如是シケル間、風雨ニ身ヲサラサレ、飢食ニ脾胃瘦レテ病起リ、既ニ大事ニ及ブ、様様療治ヲ加フレドモ本復セズ、余多ノ医者、尽ク放ス、我モ一定死ニ究メケリ、位詰ニ成、何トモ活ラルベキ様ナカリケレバ、近里ノ親類共、皆是聚ル、我弟、大略ノ医者ニテ有ケルガ、此由ヲ聞、来リテ言ハ、薬モ何モ入ヌ、只食養生ニテ能候ント云フ、其故ヲ問バ、肉食ノ事也ト云、我疾モ云ザル事ヨ、養生ナラバ死人ヲモ喰ベシト云テ用之、二日程カ、リテ、スキト本復ス、病癒テ薬モ用ナケレバ、亦潔斎シテ今日ニ及ベリ、其比、人ニ悪ク云レタルト言事、中中ノ事也、モハヤ其時危フ死ニケレドモ、恥知ズノ正三ナレバコソ、生命ヲ養ヒ立、今日ニ存命テ、修行モ大略ニハ仕上セタレ、総而、切タ心ナクシテハ物ハ成セヌト也

『驢鞍橋 下 百五十』

亦、秀和尚曰、此前、師ト同、大坂三郎九郎殿ニ至、折節、三郎九郎代官処ノ中、去大身ノ庄屋、無質ヲ以テ人ヲ滅シ事ヲ工ミ、僉議ニ逢、却テ我非ニ落タリ、此比、畿内ノ仕置ヲ、小堀遠江殿承ニテ、伏見ニ居給ニ仍テ、彼ニ云遣シケレバ、明日キツト庄屋一門、男女共ニ死罪ニ行ベシト云来ル、時ニ師聞曰、男子ノ義ハ尤也、女人ノ分ハ、何トゾ助度者也ト有ケレバ、亭主曰、公義ヨリノ仰付也、下ニテハ助難キ事也、師曰、権現様以来、終ニ加様ノ事ニ女人迄殺給ヒタル事ナシ、然ニ三郎九郎代ニ殺始バ、以来迄ノ例ニナルベシ、是非共、道理ヲ申達スベシト云テ、自ラ日本国中ノ神ニ誓願ヲ為給、扱亦大坂ヨリ伏見迄、一町一町ニ人ヲ立置、書札ヲ以テ、其意趣ヲ申通ジ、其夜中ニ五六度問答往復シテ、終ニ多ノ女人ヲ助給、総而、若時ヨリ、人ノ為ニ善事ナレバ、進デ勢ヲ出シ給、殊ニ人ノ悪キヲ見テハ、我ヲ忘テ憐給ト也。

—10人会— リレー・エッセー 935 — 2024.11.22

香風溪のもみじが今、真つ盛りです。
ピークに先立って十一月一日、香積寺にて三栄本秀大和尚様への謝恩法要が行われました。三栄和尚は境内にもみじを植え、この地を風光明媚な景観に変えた最初の任職です。
今から三百九十年前、寛永十一年に香積寺十世台庵榮天住職が亡くなりました。先代住職のあとを継ぎ、直ちに任職に就任したのが三栄和尚です。
大自然と調和し心を調え自らのいのちを精一杯生きることが仏教の目指すところだと考えた三栄和尚は、飯盛山と巴川沿いにもみじを植えました。

「もみじの開祖」もう一つの顔



佐藤一道

住職みずから植樹しているという聞けば、当時は穏やかな世相だったと思われるかもしれませんが、本当にそうでしょうか。
江戸幕府が成立して三十年、徐々に政局不安は解消されました。しかし、住職就任三年後には天草島原の乱が起り、国中大混乱に陥りました。人と人が刀で斬りあう時代を三栄和尚は生きていました。

三栄本秀は鈴木正三の愛弟子

地元では「もみじの開祖」と呼ばれ植樹の事跡しか知られていませんが、実は峻厳な禅風をもって地域住民を導いた仏教指導者でした。
先代住職、台庵和尚のもとで修行していた三栄(当時42歳)は或る日、台庵和らび正三のお供をしました。さらにまた、三栄はたびたび正三のお供をしました。寛永八年、正三53歳、三歳年下の三栄は50歳、ふたりは大坂へ旅立ち、正三の実弟、鈴木重成公が上方代官を勤めている大坂屋敷に行きました。

一族は男女ともに死罪と判決されました。伏見奉行小堀遠州守が下したこの判決に正三は反対しました。
「江戸幕府になって以来女人まで死罪にした判例はない。弟よ、そなたの代で女人を死罪にすれば以後そのことが例になってしまふ。是非ともこれを覆すべきである」と重成を諭し、伏見奉行を説得しました。
正三の言行を記録した『驢鞍橋 下巻 百五十』に三栄がその場にいたことがはっきり書かれています。
困っている人のために力を尽くす正三の心意気を知らず知らずのうちに三栄本秀は身につけていきました。

さとう いちどう 豊田市綾渡町奥 12、平勝寺住職。1948年名古屋生まれ、同志社大学工学部卒業。1976年、紫竹林安泰寺にて出家、同寺にて十年修行、1988年から平勝寺に住む。

東南アジアの仏教

第二回

前回は世界のメインストリームの仏教事情を紹介し、日本の大乘仏教が非常に特殊なあり方をしているということを東南アジア（テーラワダ仏教）の仏教視点から説明しました。今回は引き続き、東南アジアの仏教の戒律や修行システムについて概説していきます。日本の大乘仏教と比較することを通じて、日本にいと中々見えてこない大乘仏教の輪郭をスケッチすることを目指します。

- テーラワダ仏教の戒律 227 戒
- 仏教の修行システム 三学ー戒・定・慧
- 日本大乘仏教の戒律 大乘菩薩戒
- 日本大乘仏教の戒定慧
- テーラワダ仏教のお経と大乘仏教のお経
- 二つの涅槃経

<参考文献>

涅槃経を読む 高崎直道 岩波書店

大乘仏教の誕生 高崎直道監修 春秋社

In this very life U.Pandita Sayadow Wisdom Publications

Mahā Parinibbāna sutta(Dīgha Nikāya16) Pāli text society London